

保育実践力の育成・向上に関する研究

—実習の意欲を高める指導—

杉江 栄子* 清 葉子** 脇田 町子*** 加藤 道子****

1. 研究目的

最近、保育者養成校での実習を通して、保育の実習の中で困難を感じて自信をなくし、保育者になることを躊躇する学生が増加傾向にある。実習生が実習を肯定的に受け止め、意欲的に取り組むことができるようにするにはどうしたらよいのだろうか。

保育者を目指す学生は、保育の養成校に入学し、保育実習を経て、保育の現場に就職するという過程を辿る。この過程の中で、保育職から気持ちが離れるタイミングとして、実習で保育職への思いについて挫折するあるいは断念する場合と、就職してから休職離職する場合とが考えられる。そこで今回は、実習を視点を捉え、実習をする中で、保育職への思いについて挫折するあるいは断念する場合に視点を置き、学生が実習で保育職を目指したいという意欲を保つ、高めるため、実習を受け入れる側に何が必要かをとらえたい。

保育現場では、求人があるにもかかわらず就職者が足りない、あるいは、就職したにもかかわらずに休職や離職をするなど、人員の不足に悩まされている。林らは、2013年に「学生から保育者への移行期支援」¹⁾として、若年保育者の不本意な離職・休職を防ぐという視点で追求している。この研究の中で、養成校段階あるいは保育現場と連携して、休職や離職を予防するためにできることとして、「新任者の職場適応を促し、同時に在職者と新任者の関係を良好に導き、結果的に保育職に対する満足感が得られること」に加えて「就職前のサポートの必要性」に言及している。「新任者が、配属された園の職員として慣れ、一員として動けるようになるためには、ある程度の移行期間を設ける必要がある。学生から保育者への移行期間を設け、その期間のガイダンスまたは研究などを充実させていくことも新任者のスムーズな職場適応を支援する方法の一つ」としている。

実習に関する先行研究として、川端は「実習は多くの学びを与えてくれるが、ただ参加すれば学習が進むわけではなく、それを豊かな経験とするために教員や保育者が協働して学生を援助していく必要があることを示している」とし、「学生にとって実習の見通しがつきやすい到達目標の共有、課題設定の個別性と柔軟性の確保、学生の自己改善への手がかりの提供、相談しやすい雰囲気作りや場の設定などのケア環境の充実が求められよう。」としている。²⁾ また入江は「教育・保育実習は保育現場を体験する実践的な授業であり。学生はこれを契機にして、幼稚園教諭や保育士を自分の職業とするか否かを考え始めるのではないかと考えられる。」とし、「うまく実習することができず取り乱しそうで不安だ “、などの項目を含む『指導力不安』は、“周りの人と協力して物事に取り組むことができる”などの『協力的対人関係』があれば、低減化する。」と示している。³⁾

* 高浜市こども未来部こども育成グループ

** 椛山女学園大学

*** 名古屋学芸大学

**** 至学館大学附属幼稚園

このように、実習担当者は実習生に対し、相談しやすい協力者であることが求められている。実習生が何をどこまで理解しているのか、わからないのかを理解し、求められる具体的指導を行い、実習生自身が指導を受けたことで手応えを感じる必要がある。具体的な指導とは、子どもの発達や個に応じた姿の理解、保育の計画の立て方、記録など書類の作成、言葉かけや環境構成など具体的な場面での実践などわかりやすく解説し、共に日々の実習を高められるよう評価することであると考えられる。これらの実習指導の内容は、実習担当者の専門性が問われるものであり、自分よりも経験の少ない保育者へアドバイスする際の力量そのものでもある。なにより実習担当者が自分の保育を説明する経緯において、保育の振り返りをする事となり、実習生指導によって、自らの保育実践力を高められると考えることができる。このようなことから、実習指導も保育者の実践力と捉え、どのような指導が求められ、何が支えとなるのか、学生の実習の意欲を高めるための要因を分析し、保育者の保育実践力の向上について探ることが本研究の目的である。

2. 研究方法

質問紙調査

- (1) 対象：愛知県内の保育者養成大学2校の実習経験後の学生101名（回収率100%）
- (2) 実施時期：平成26年7月（保育園実習後）
- (3) 調査内容：基礎調査および実習継続困難の意識の有無、困難を感じた理由、困難を感じた続けられた理由、今後の進路について等5項目。

3. 結果と考察

(1) 実習を困難と感じた実習施設別の割合

「実習中に実習を嫌と思った、辞めたいと思うことがありましたか。」の質問に対し、「すごくあった」の回答者は14.8%（15名）、「少しあった」は39.6%（40名）、「あまりなかった」は34.7%（35名）、「全くなかった」は10.9%（11名）であった。「すごくあった」と「少しあった」との回答を合わせると、54.6%（55名）であり、実習について困難を感じた回答者は、全体の過半数である。

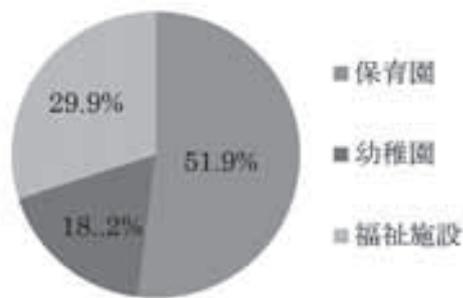


図1 実習施設別割合

困難を感じる事が「すごくあった」「少しあった」理由について、複数回答で問うと、77件の回答があった。実習施設別に理由について回答があった割合をとらえると、左の図のように、保育園の実習で困難を感じたとする回答が51.9%と半数を占め、続いて幼稚園の実習で困難を感じた回答者は18.2%と2割近くになり、福祉施設の実習では29.9% 3割程が困難を感じたとの回答が得られた。

(2) 困難の要因

実習生が困難を感じた具体的な理由について自由記述で回答について、内容を分析した結果、下記のように概ね4つに分類できた。分類の結果から、実習生が抱えている具体的な課題を明らかにすることで、担当者に求められる指導のポイントを探ることとした。

回答例①

「適切な指導がない」

「園でどのように動いたらよいかわからず、何もできない自分に嫌気がさした」

「書類の書き方がわからなかった。書類を書くのに時間がかかった」

⇒このように保育の具体的な方法や、日案や日の記録など書類の書き方の指導等即行動できるようにする指導を①直接的指導と分類する。

回答例②

「反省会がなかった」「批判ばかりだった」

「保育後に先生がどこかに言ってしまい、指導が受けられなかった」

「完璧を求められてついていかなかった」

⇒このように実践結果の評価やアドバイス等、実践後の助言、アドバイスを②間接的指導と分類する。

回答例③

「先生が他の先生の悪口を言っていた」「嫌味を言われた」

「子どもの前で大きな声で怒られた」

「担任の先生がぶっきらぼうな人で、わからないことや不安なことを気軽に相談できずにいろいろと失敗した」

⇒このように、実習先の施設全体の人間関係や、実習生と実習担当者との関係性等については③実習施設の雰囲気と分類する。

回答例④

「睡眠不足だった」「トイレに行く時間がなかった」「体調を崩しかけた」

「体力面で大変だった」「子どもがうるさいと思った」

⇒このように、健康管理・資質・子ども理解が不十分等については、④実習生本人の課題であると分類する。

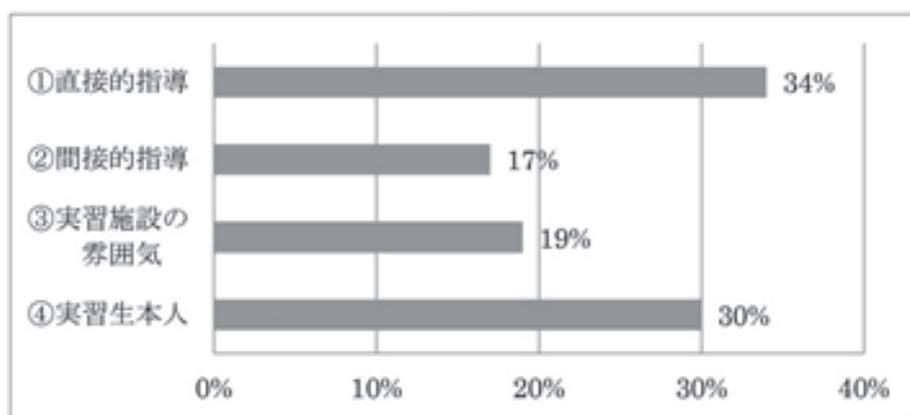


図 2 困難の要因

図2の通り、回答を分析し、4つのカテゴリーに分類したところ、困難の要因として、①「直接的指導（保育方法・書類の書き方の指導等）がなかった」との回答者は34%（26名）、②「間接的指導（実践結果の評価・アドバイス等）がなかった」の回答者は17%（13名）、③実習施設の雰囲気（実習先の人間関係・指導者との関係性等）が良くなかった」の回答者は19%（15名）④実習生本人の課題（健康管理・資質・子ども理解が不十分等）と考えられる回答は30%（23名）であった。（複数回答）

困難を感じる理由の分析の結果から、実習生は、実習で直接的な指導を必要とし、実習施設には、実習生が即行動に移せるような具体的な指導を求めていることがわかった。また、実習生自身が体調不良になったなど本人の理由も多いことから、実習生自身が普段から心身の健康に努め、子ども理解を

深めることも課題であることも明らかになった。

(3) 実習施設別の困難の要因と手立て

実習施設別に、困難と感じた理由について自由に記述したものを分析したところ、概ね図3のような直接的指導、間接的指導、実習施設の雰囲気、実習生自身の4つに分類できる。図はそれらの要因についての実習施設別の件数を示し、困難な主要因から手立てのポイントを明らかにした。

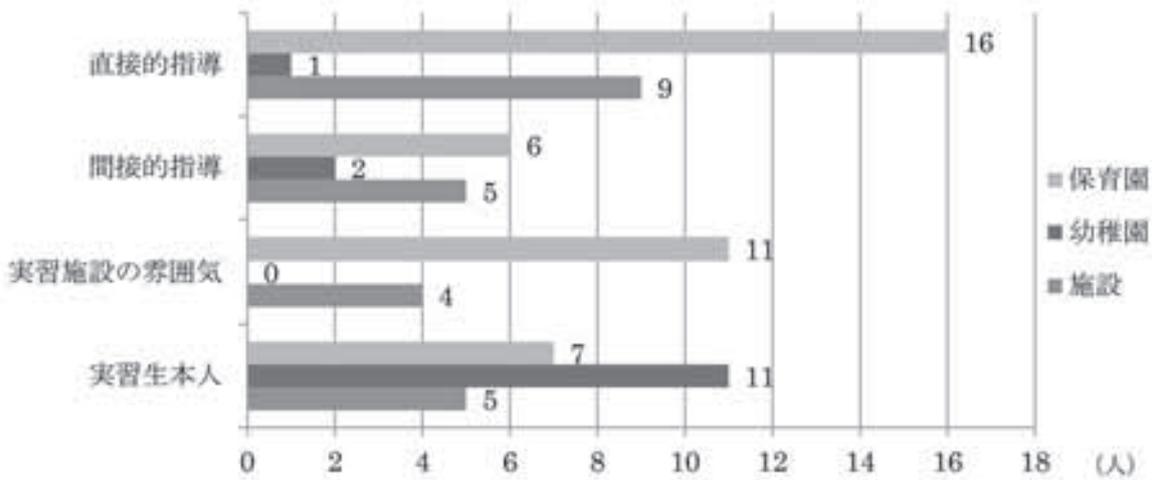


図 3 実習施設別の困難の要因と手立て

各実習施設別の困難な理由を①～④のカテゴリーに分析した結果

○保育園について

直接的指導がなかったとの回答者は16名、実習施設の雰囲気によって困難を感じたとする回答者11名であった。保育園での実習を困難と感じさせた主要因である、「具体的な指導がなかった、指導内容が十分に理解にできなかった」に対しては、受け手である学生の疑問を把握し、指導のポイントを吟味して対応することが必要であると考え。保育園の実習で困難と感じたとの回答が多いのは、保育時間が他の施設と比較して長いことから、指導を受ける時間が限られていること、保育実践する実習時間が長いことが実習を困難とする要因のひとつと推測される。短時間であっても、わかりやすい助言と指導習生の実習段階に応じた適切な指導をすることが重要である。そこで、実習施設における事前、事後訪問での説明、打ち合わせについても、指導時間と位置づけ、実習生自身の疑問や不安に応えることが必要であると考え。

実習担当者は、課題だけでなく、感情も共有できる存在として、多忙を極める保育現場において、過程を重視する実習指導をすることが求められていると考える。

○幼稚園について

困難を感じた理由のほとんどは④実習生本人の要因であり他の実習施設と比較して指導面で困難を感じた学生が少ないことがわかった。健康管理や実習に向けての準備や心構えが不十分であることに対して、具体的な保育の指導だけでなく、体調を気遣う言葉がけや、健康管理の方法について相談を受けること、指導することが必要である。健康管理は、社会人、保育職として重要な事項として実感できることとして実習中に伝えたい事項である。子どもの理解については、学生の子どもと触れ合う機会の不足を考慮すると、養成校での学びと結び付けていくことを積み重ねて深まるものとして、実

習生が困難を感じないように、実習担当者が解説をする必要があると考える。また子どもの理解は、奥が深く、経験を積み重ねて磨いていくものであることを知らせ、今後に期待できるものとして前向きになることができるように指導することが大切である。

○福祉施設について

福祉施設での実習について困難を感じた理由をについて回答例を下記に記す。

<福祉施設での実習で困難感じたとする理由の回答例>

- ・何をしたらよいかわからなかった。
- ・こちら側の思いが伝わらず、注意を受けた。
- ・子どもとどのように接していいかわからなかった。
- ・子どもとなじめなかった。
- ・職員の方が冷たかった。
- ・利用者の方に腕を噛まれたことで精神的に参った。
- ・利用者に叩かれた。
- ・夜勤があった。 ・泊まりが辛かった。

直接的指導がなかったとの回答者が9人、その他の要因はそれぞれ5人と理由はさまざまである結果であった。回答例から、困難を感じる要因は、具体的指導、結果の評価、子ども理解、職員との関係性、事前情報とその理解の不足など多岐に渡っていることがわかる。福祉施設では、その施設の役割において、利用者の背景や実態の理解、対応の配慮、宿泊は必要であるなど、幼稚園や保育園とは違う点について事前に心構えや注意事項、対処の仕方など幅広いサポート・指導が必要であると考える。

(4) 実習の意欲を支えた要因

実習中に困難を感じたとする実習生が過半数であったが、困難を感じたと回答しながらも実習を続けていることから、継続できた理由やきっかけについて、エピソードを自由記述形式で回答を得た。その具体的な回答の中から、実習生の実習意欲を支えた主な要因をとらえ、実習担当者、実習を受け入れる園側に求められるものを考察する。質問と回答例を以下に記す。

質問

「実習を嫌と思ったり、辞めたいと思っても続けられたのはなぜですか。そのきっかけや理由となったと思われるエピソードを書いてください」

回答例①

「子どもが『先生大好き！明日も先生の遊びがいい』と言ってくれたから」

「わからないことを先生方が親切に教えてくださり、頑張ったことを認めてくれるような声かけをしてもらえたため。また、何よりも子どもがかわいいと思ったため」

「何か辛いことや記録が大変と思っても次の日子どもの笑顔を見ると、頑張ろう、頑張ってよかったと思うことができ、日々子どもたちに励まされていたから」

「こども達のかわいい一面を見て元気が出たから」

⇒このような回答は、実習生が直接的に「①子どもが可愛かったなど子どもとのかかわり」により、子ども達から得られた気持ちの支えである。実習生の中には、子ども達の中にすぐには飛び込め

ない、または子どもにどのように接したらよいかわからずに躊躇する学生もいる。実習担当者は実習生と子どもとの出会いの場、機会、きっかけをつくり、互いの仲立ちをするサポートが必要である。

回答例②

「先生が優しく、またアドバイスをたくさんくださったため、充実していた」

「担当の先生がとても優しく常に気にかけてくださった。何をしたら良いか明確であったため行動しやすかった」

「『ゆっくり休める?』など気にかけてくれた。」

「先生や保育士の方がとても協力的で私の力になってサポートしてくださった」

「先生方も親切に話を聞いてくださり、私の足りないところ、良いところを教えてくださいました。子どもたちと多くかかわることができ、実のある実習でした」

「日誌や指導案は毎日大変なことだとは思っていたけれど、実習の担当の先生に恵まれ、とても良くしてもらった。自分自身こんな保育者になりたいなと思えたので、辞めたいとは思わなかった」

「実習担当の先生はもちろん、園の先生方全員がとても優しく丁寧に教えてくださった。日誌や指導案に追われ辛い時もあったけど、先生や子ども達のために頑張れました。とても充実した実習でした」

⇒このように②実習施設の良好な雰囲気の中、実習担当者とのよい関係を築き、適切な実践的指導を受けたことは、励ましや気遣いを受ける中で、具体的なアドバイスを受けることは、実習生の安心感、実習に対する意欲と自信につながったことがわかる。

回答例③

「友達と家族に支えてもらいました。また本当に実習をやめたいと思った時に、大学の先生が『電話をかけておいで』と言ってくださり、話を聞いてくださったことがとても支えでした。

あの時電話していなかったら、本当にこの保育者という道が大嫌いになっていたと思います。」

「友達と話をしたり、その後の実習をしていく中で、やっぱり子どもと関わる職につきたいと思ったから」

「仲間がいたから。一緒に夜泣きました。また巡回の先生がたくさん話を聞いてくれて味方になってくれたから」

⇒このように③家族、友達、養成校の教員など、実習担当者以外からの精神的サポートやアドバイスが大きな支えであることもわかった。

回答例①②③から、実習生の実習意欲を支えた主な要因としては、回答の多い順に①子どもが可愛かったなど子どもとのかかわり、②実習施設の良好な雰囲気の中、実習担当者とのよい関係を築き、適切な実践的指導を受けたこと、③家族、友達、養成校の教員など、実習担当者以外からの精神的サポートやアドバイスが大きく影響していることが明らかになった。日頃の職場のよりよい人間関係の構築は、実習生の実習意欲を高め、実習の円滑化や実習スキルの向上により効果を及ぼすと思われる。

実習指導者が実習生と良好な関係性を築き、実習意欲を高められるような指導を行うことが重要であることがわかった。実習での経験を意味付け、価値付けし、実習生自身が達成感を得られたという経験を通し、実習の意義を見出す指導が求められると言えよう。

(5) 進路選択について

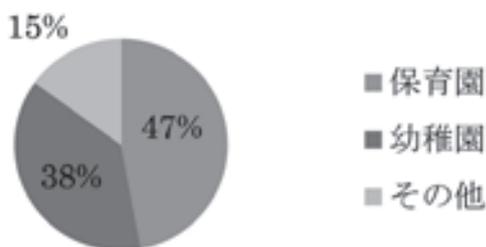


図 4 進路選択

卒業後の進路の希望先は、保育園47%幼稚園38%であり、保育園と幼稚園を合わせて85%の学生が保育職を目指したいと考えている。

「実習をしてどんどん保育者になりたいと思う気持ちが膨らんだ」などの回答から、実習での学びがその後の進路選択に大きく影響を与えることが考えられる。実習に困難を感じたが、乗り越えられる支えを受けて、保育職を目指していることがわかる。

進路選択の理由

①保育園を目指す理由の回答例

「実習をしてどんどん保育者になりたいと思う気持ちが膨らんだ」

「最終日の反省会の時、園長先生から『反省を活かして素敵な保育士さんになってください』と言われて、もっと頑張ろうと思いました」

「チームで保育してみたい」

「先生方の笑顔や挨拶、関わり方がとても尊敬でき、実習中は自分もそのようになれたり、実習以外も心がけるようになった。挨拶をする気持ち良さを感じることができた。また、子どもが好き」

②幼稚園を目指す理由の回答例

「自分の生活に合っていること、先生方から教わることが多くありました。乳児を保育するよりも短い時間の中で関わり、遊びの中から学び、教育も同時にしたいと思いました」

「いろいろな園に見学に行き、自分にあっていると思える園に出会えたため」

「園の方針とアットホームな雰囲気に心惹かれて働きたいと思った」

実習に困難を感じたが、乗り越えられる支えを受けて、保育職を目指している学生が多くいる一方で、実習を終えて、幼稚園、保育園以外の職業を目指すとの回答者について、実習で困難と感じた理由について回答例を以下に記す。

<回答例>

「子どもの前で大きな声でおこられた」

「私が考えたことは全て却下されたのが悲しかった。反省会で指摘されたことは、担任の意見なのに、私の勉強不足だったみたいに指摘してきたことが嫌だった。」

「『これくらいも分からないの?』と子どもの前で叱られた。『声小さいし向いていない』と言われて嫌だった。保育職は本当に素敵だと思うけど、私の性格上合わないのではと実習を受け、思ったため」

「私の行動に対し、すべてを否定し、私自身を否定したり、嫌味を言われた。初日から毎日だったので辞めたかった」

このような回答例から、実習指導だけが保育職以外の職業を目指すことにつながった理由とは限らないが、実習を受けたことで、実習生自身が将来につながる課題を得られ、前向きになれるような指

導が求められると考える。

4. おわりに

実習生への指導は、指導計画の作成、保育実践の進め方、事前の環境構成、言葉かけ、援助、環境の再構成、保育者のモデリングなど多岐に渡る。実習担当者はこれらのことを熟知し、伝達する能力が求められる。肝心なことは、実習担当者から実習生に一方的に伝えるのではなく、実習生が求めていることをとらえ、わかりやすく、良好な関係性の中で受け入れられるように指導助言することであることがわかった。限られた、実習期間と振り返りの時間をいかに充実させていくかが大切である。個々の実習生が園に求める指導内容の把握については、養成校と連携することも今後の課題のひとつであると考える。

このような実習生に対する園の課題は、良好な人間関係のある職場風土の中で、限られた時間を有効活用し、保育の質の向上に向けて実習生と実習担当者が互いを高め合う手立てを探ることであり、日々の現場での課題と重なる。また、実習を困難に感じる要因のひとつであった、実習生本人の課題、普段から心身の健康に努めること、子ども理解を深めることも、現場で求められる基本的な資質である。

実習生を受け入れる園、実習担当者は、実習生が求めるサポートを理解し、実習生への指導を通して、自らの保育実践の改善になること、実習生の将来への職業意識に影響を及ぼすことを意識することが必要である。実習指導の過程が実習担当者自らの、そして園全体の保育実践力の向上につながると意識し、実習生とともに学び合う姿勢が求められる。

<引用文献>

- 1) 林牧子・新井美保子 (2013) 学生から保育者への移行期支援—若年保育者の不本意な離職・休職を防ぐために— 愛知教育大学幼児教育研究
- 2) 川端奈津子 (2014) 実習体験が学生のレジリエンスに及ぼす影響—保育実習指導におけるレジリエンス維持・回復のための試み— 保育士養成研究第32号
- 3) 入江和夫・福地昭輝・入江三律子 (2014) 学生の保育実習不安と自立感— 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第38号

<参考文献>

- 津田尚子他 (2014) 保育実習指導の事前指導の現状についての一考察— 関西福祉科学大学紀要第18
- 長谷秀揮 (2014) 保育実習Ⅱにおける学生の学びについての一考察— 四條畷学園短期大学 NII— Electronic Library Service